

経営学部 50 周年記念によせて



京都産業大学名誉教授 後藤文彦

「今年はないな。」と思っていました。昭和 43 年の 12 月も暮れかけていた頃のことです。ほぼ諦めていたそんな時期に京都産業大学から突然話がありました。その大学がどこにあるのかも知らなかったので、大学を見に出かけました。生憎、天気はよくなく、時雨模様でした。四条から河原町通を上がって加茂街道にさしかかったころには、雨はみぞれに変わっていました。到着した大学では、スチームがガンガンたかかれていて、入り口や窓のガラスが一面に曇っていました。このような、降って湧いたようなまったくのご縁としかいいようのない始まりでした。

爾来、分かり易い授業を目指して教壇に立ってきました。最初に担当したのは簿記でした。簿記は暗記科目だと思われがちです。しかし、じつは、まったくそうではなく、整序されたきれいな論理で出来上がっているのです。ですから、簿記の論理が分かれば、論理の出発点になるたった一つの約束事以外は暗記することはないのです。このような考えにもとづいて授業を組み立てていました。

論理は図形化することができます。そこで、授業の内容をすべて図形化して講義していました。当時の上司である戸田博之先生や同僚の藤井則彦先生との共著『新稿 企業簿記』(1980, 中央経済社)の私の担当部分や私の主著『税務会計システム論』(1998, 中央経済社)が図表を用いて展開されているのはその名残です。

ところが、ある時、「学生たちは分かるということに興味を持っていない。」ということに気がつきました。彼らには、分かるということの意味が分からないのです。彼らは、分かるために授業を受けているのではなく、卒業のために必要な単位をとるためだけに授業を受けているのだということに気づいたのです。

そのことに気づいてからは、学生の興味を惹くことに注力しました。彼らの知的好奇心に期待を寄せていたのです。そのために、授業をゲーム化することを考えました。ゲームによって彼らの知的好奇心がくすぐられるのを期待したのです。拙著『ゲームでわかる法人税申告書の書き方』(1992, 中央経済社)にはこのような背景があります。当初はうまくいっているようにみえましたが、やがてゲームが遊びに変わっていきました。彼らの知的好奇心は手の届かないはるか心の奥底にあり、

ゲーム性をたんに楽しんでいるだけに終わってしまったのです。このようなわけで、この試みも失敗に終わってしまいました。

次の手に思い悩んでいるとき、キャリアの世界でいわれるハプンスタンス (happenstance) に出会って、その後の教育観がコペルニクス的に変わってしまいました。なんと、教えるということを止めてしまったのです。まず、交流分析の分野で、心のエネルギーを自在に活かす力 (透過性調整力) を測定する尺度を開発した人と出会いました。透過性調整力の強い人はものごとに関して強いコミットメントをもっているといわれているので、そのことが学びへのモチベーションにつながると思っていたのです。爾来、受講生の透過性調整力の伸長を目指して、彼らの透過性調整力を継続して測定し続けてきました。

ほぼ時を同じくして、つぎは、学びの分析単位が個人の中だけではなく、共同体にまで広がっているという考え方に出会いました。共同体への参加が学びのポイントになっているというのです。学びに関するこの考え方が心のエネルギーを自在に活かす力とドッキングしたのです。心のエネルギーを自在に活かす力が強い人は強いコミット力をもっており、その力は参加する力に他ならないからです。心のエネルギーを自在に活かす力を媒介にして、大学での学びに関するモチベーションと卒業後の職場での協働へのモチベーションとを同じプラットフォーム上で分析できることに気づいたのです。幸いなことに、そのころ、卒業生調査にかかわることができて、この気づきを実証することができました。その成果は『幸せを求める力が育つ大学教育』(2017)としてナカニシヤ出版から出版しました。

その後、心のエネルギーを自在に活かす力はさらなる展開をみせることになります。若者の主体性問題は幼稚園から大学までを貫く教育上のメインテーマであることは中教審の答申を見るまでもありません。主体性問題は教育上の問題にとどまらず、産業界の人材問題でもあります。そのような意味では、若者の主体性問題は、いまや、国家的問題だといっても過言ではありません。長年蓄積してきたデータを分析した結果、心のエネルギーを自在に活かす力は主体性にもかかわっていることが明らかになりました。この件に関してはすでに脱稿済みで、目下、出版社と出版の交渉中です。出版に漕ぎつけるのを心待ちにしています。

さらに、文科省の競争的資金を活用して、当初は、心のエネルギーを自在に活かす力のみならず、受講生の知能構造をも測定していました。400名ほどの貴重なデータが残っています。退職にともなうて時間に余裕ができたこともあり、そのデータをいじっているうちに、当時は気づけなかった新たな発見をするに至りました。柔軟な発想を持っているグループの心のエネルギーを自在に活かす力がそうではないグループに比べて統計的に有意に高いことが明らかになったのです。心のエネルギーを自在に活かす力は心の健康度をあらわしているといわれています。したがって、柔軟な発想をする人の心の健康度は高いといいかえてもよいことになります。かつて、マズローは、心が健康な人は創造的であるといいました。まさしく、そのことを髣髴させる分析結果ではありませんか。しかも、心のエネルギーを自在に活かす力を伸長させる方法は、本学ですでに開発済みなのです。公刊でき

る日を夢見て、ワクワクしながらワープロに向かっている今日この頃です。

退職後もこのような気持ちで毎日を過ごせるのも、降って湧いたような縁で拾っていただき、大勢の学生に囲まれ、多くの皆様に支えていただいたおかげだと感謝いたしています。拙著を世に問うことが在職42(+3)年間にわたるご恩に報いることになれば望外の喜びです。50周年を迎えるにあたり経営学部の益々のご発展を祈念いたします。